

環境省、羅臼町及び(公財)知床財団のルサ地区における共同事業に関する協定について

平成 29 年 9 月 27 日、環境省、羅臼町及び(公財)知床財団は、ルサ地区において環境保全に関する共同事業を進めるため、協定を締結した。

1. ルサ地区の背景

知床国立公園の玄関口であるルサ地区には、2009 年 6 月に環境省により知床世界遺産ルサ・フィールドハウス（以下ルサ FH）が設置された。施設周辺のルサ川右岸一帯も 2010 年度に国立公園に組み込まれたが、施設周辺の整備は未だ着手されておらず、アメリカオニアザミをはじめとする外来植物が繁茂する荒地となっている。

一方、ルサ FH のそばを流れるルサ川とその流域は、シロザケやカラフトマスが自然産卵でき、知床を代表する動物が暮らす豊かな環境を有しており、エゾシカやヒグマといった大型哺乳類、希少猛禽類のクマタカやオジロワシ、オオワシ、シマフクロウなどを観察できる場所である。

ルサ FH の施設周辺の整備に関しては、土地所有者である環境省をはじめ、その他の行政機関、団体との議論の中でも必要性が叫ばれているが、公園計画の変更手続きが進まない中、いまだ具体的な進展がない状況であった。

2. (公財)知床財団への寄付による森林復元

上記のような状況の中で、2016 年に地元企業からルサ FH 周辺地区の森林復元を目的とした寄付が(公財)知床財団にあり、(公財)知床財団内部で復元手法について検討された。その結果、新たに植樹などを実施するのではなく、現在現地に自然分布しているトドマツなどの稚樹の生育を促すような措置を実施する方が、長い目で見た場合に確実な森林復元につながる可能性が高いと判断された。

ルサ地域特有の強風と、エゾシカの食害が樹木の育成を妨げている要因として考えられることから、まずは当該地区の一部を自立式防風柵で囲い、強風とシカの侵入を防いだ状態を維持しながら、柵内の樹木生育状況や植生をモニタリングしていく。順調に樹木の生長が進んでまとまった林になれば、その林が防風柵の代わりとなって、その周辺の稚樹の生育も進んでいく可能性がある。



<防風防鹿柵設置候補地>

●盛り土サイズ

25.0 × 25.0m (約625 m²)

高さ: 約 0.3~1.0m



- ① 盛り土上及び周辺環境は、残土(岩石)が露出・堆積するいわゆるガレ場。海側のフィールドハウスにかけては牧草が繁茂。
- ② その所々に針葉樹(トドマツ)が生育。ただし、風や雪の影響で樹高は低い。また、広葉樹の実生も見られるがシカの採食を受け、成長できず。
- ③ 冬期は、吹き抜ける風の影響で雪が溜まらない状況。針葉樹も積雪の深さ以上には樹高を伸ばせないものと思われる。



図1: 自立式防風防鹿柵(イメージ図)

- ・ 自立式。地中への埋設はなし。
- ・ 上段に金網、下段に横板を使用。
- ・ 1スパン(本柱間)=2.5m
- ・ 柱と柱はボルトナットで固定
- ・ 横板は釘(3寸5分)で固定
- ・ コーナーにマンパス設置(第2期工期設置予定)
- ・ 強風対策として、設置後に周辺の岩石等で押さえる。



図2: 施工した自立式防風防鹿柵